

## 大人への条件 その5 構造再構成作文集

(1)

近年日本では「大人への条件」が曖昧になっている。その原因は三点ある。一点目は「境界線が無くなった」こと、二点目は「子ども期の見方の変化」があったこと、三点目は「心と体のずれ」が起こったことである。

一点目の原因「境界線が亡くなった」ことについて説明する。近代以前の社会はそれぞれの社会の要請に見合った「通過儀礼」により、子供と大人にはつきりと分けられていた。しかし現代では、それらの境界線を取り払い、変わりにだらだらと長々しく続く「教育課程」というシステムを導入した。このプロセス(過程)が大人と子供との節目を希薄化させ、「この日から大人」といった感覚をなくさせたのである。

二点目の原因「子ども期の見方の変化」について説明する。近代以前、子供はごく早い年齢段階から生産にかり出され、大人の世界に参加させられていた。つまり子供は皆、自立と責任感を兼ねそなえた育つにまかされた「小さな大人」であった。しかし近代では子供は家族に守られ、「育てる」対象として十分なまでに親に大切に扱われている。どのような存在として子供を見るか、変化してきているのだ。

三点目の原因「体と心のずれ」について説明する。近年、身体的にはとうの昔に大人になっているにも関わらず、学生などであるためにいつまでも親に経済的援助をもらったりと、社会的な自立をしようとしなない人が増えてきている。これは「身体的「体」と「社会的「心」殿間でそれぞれが大人の条件的なもの(生殖期の成熟、経済的自立、責任……など)を満たす年齢期にずれが生じてしまったということである。

(2)

## 《第1段落省略》

一点目の「境界線が無くなった」ことについて説明する。「境界線」というのは、子どもが大人になりかわるときの「境界線」である。その「境界線」が無くなったというのは、子供が、大人になるときがわからなくなってしまうということである。その理由として、近代の教育制度は、自分がどこで大人になったのかという自覚を、曖昧なものにさせる効果を持っていたからである。

二点目、「子ども期の見方の変化」について説明する。近代以前では、大人は皆、子供のことを小さな大人と認識していた。よって子どもに対する態度は、少々厳しく、子供へのしつけも多かった。しかし、今になると、大人は子供といつまでも子供だと思い、大人は子供の未熟さを気にするようになった。だから、子供は、いつまでも子供でいるようになってしまったのである。

三点目の「体と心のずれ」について説明する。近代以前では、人は、将来のことをよく考え、大人になったときのための準備や、心構えをしていた。しかし、今の人は、高校を卒業しても、あるいは大学を卒業しても、自分は大人になつたという自覚を持たなくなり、しかも自分はまだ子供でいたいという意志を持つようになった。よって、今の人は大人になることが曖昧化しているのである。

(3)

《第1～3段落省略》

三点目の「体と心のずれ」について説明する。子供はいつになったら大人になるのかがわからなくなり、自分は今日から大人になった、と本当に自覚できるような契機が無く、「生理的成人」の年齢と「社会的成人」の年齢の間に、ギャップが開いてしまい、社会は、年少者に対していつおまえは大人になった。「教科はおまえは一人前だ。」と一般的に宣言できるのが、わからなくなつてしまったということだ。

(4)

《第1段落省略》

一点目の「境界線が無くなった」ことについて説明する。「教育課程」は、節目のはっきりしない大変間延びしたプロセスである。それは、人間はだんだんと段階的に成長していつて大人になるものだというイメージを私たちの中に知らず知らずのうちに植えつける。近大の教育制度は、自分がどこで大人になったのかという自覚を曖昧なものにさせる効果を持っていたからである。

二点目の「子ども期の見方の変化」について説明する。近代以前には、子ども期と呼べる時期は存在せず、子供は小さな大人であった。近代、子供は社会から隔離された家族の中で、保護としてけと教育の対象として「大切」に育てられ、親子の同居期間は長くなり、身体的に成長した子供、社会的には未成熟な存在となつて家族の中に留め置かれたため、子ども期の見方が変わったのである。

三点目の「体と心のずれ」について説明する。現在では、二十歳の成人式を過ぎても、学生であるために経済的に親におんぶしていたり、三十歳を過ぎてても、結婚せずにいつまでも親元に留まっていたりするのは当たり前のことになつていて、

生理的成人と呼ぶにふさわしい年齢と社会的成人と呼ぶにふさわしい年齢との間に、途方もないギャップが開いてしまっているのである。

## 論文に必要なもの

シンプル

つながり

自分がわかること